



Title	葛藤の愉悦ーグレゴリー・ケズナジャット「汽水」 「開墾地」「トラジェクトリー」
Author(s)	渡邊, 英理
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナ ジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105164
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

葛藤の愉悅——グレゴリー・ケズナジャット「汽水」「開墾地」「トラジェクトリー」
渡邊英理（人文学研究科日本学専攻基盤日本学コース）

1. 言語をめぐる小説

グレゴリー・ケズナジャットの小説の魅力のひとつは、言語をめぐる小説という点にある。たとえば、「汽水」という小説。単行本『トラジェクトリー』に収められている中篇だ。『三田文学』に発表されたこの中篇は、残念ながら芥川賞候補にはならなかった作品だが、言語論としての卓抜の魅力を持つ小説だ。この小説の主人公はチャーリー。アメリカのミシシッピ州の出身、州立大学で学び、日本に留学、いまは東京の私立大学の国際科の職員である。チャーリーは、職員の仕事として、アメリカのニューオーリンズで開催される、Educational Partners Abroad にでかける。略称 EPA と呼ばれるこの会は、大学の国際交流見本市のようなもの。アメリカや各国の大学が交流する、マッチングの機会をつくるのが目的で、各大学がブースをだして、新たな提携先を探しアプローチしたりする、大学間の国際的なお見合いのような場所だ。こうした多言語状況の場所ではあるが、そこで交わされるのは、基本的には英語であり、また、そこに参加しているのは、アメリカの大学が交流したいと思う大学、アメリカの学生が行きたいと思う場所である。つまり、ここでの「国際化」とは、アメリカと英語を中心化したうえで描かれる地球の地政学だと言える。しかも、そこでは、各国やその文化が非常に分かりやすい記号で、ステレオタイプのにも表現されている。この小説は、「国際化」や「国際交流」と呼ばれる営みが帯びる政治性に自覚的で、その奇妙さこそを批評する小説だとひとまず言える。だが、そういった分かりやすい奇妙さ以上に、不可思議な働きをするものとして本作で描かれるのが、言語というメディアウムだ。「汽水」という小説は、言語や、言語をめぐる、ある種のふるまいにこそ細やかに光をあてる。

たとえば、チャーリーの上司の岩田さんが日本で話す英語と、アメリカで話す英語には違いがあるとチャーリーは感じる。日本で岩田さんが話す英語は、どこか「縦社会」を匂わせ堅苦しきがある。しかし、ニューオーリンズでカリフォルニアの大学の女性職員と話す時には、そういったものが抜けて、ゆるくなっている。まるで、隠れていたもうひとつの人格が顕れたかのようだ、とチャーリーは思う。岩田さんは、日本語と英語、縦社会的な日本の文化と、フランクな英語的な文化をそれぞれ身につけており、日本では英語を日本文化的に話し、アメリカでは英語を英語文化的に話す、複雑な切り替えと組み合わせをしながら言語を話しているわけだ。

他方で、チャーリーは、どうか。彼にとっては英語自体が実はふたつある。EPA で話されるような標準的な英語と、ニューオーリンズやチャーリーの故郷、ミシシッピで話される南部訛りの英語だ。しかし、チャーリーは、すでに長い間、標準英語を主に話している。またチャーリーは、長く日本に住んではいるが、しかし、彼が日本語を話すことを強制されたり、強く求められることは稀だ。日本社会では人の大半は彼に英語で話しかけるから

だ。だから岩田さんのような複数の文化の区別は、チャーリーの中にはないし、できていないと感じている。そうだとすれば、チャーリーは、標準英語と標準英語文化の世界を長く生きているのかもしれない。一般的には、日本在住でアメリカに仕事で行くだけの岩田さんよりも、アメリカから日本に留学し、日本で仕事をするチャーリーのほうがずっと「国際人」である、そう考えられるだろう。しかし、その身のうちに複数の言語と複数の文化を宿し、それを複雑なコンビネーションと切り替えで操っているのは、実は、一見、ドメスティックにも見える岩田さんのほうなのかもしれない。「汽水」という小説が描き出すのは、こうした矛盾とも言える背理であり、また、それぞれの身体が具体的な文脈をくぐり抜ける中でつくりあげ、実践している言語との個別的な関係、大きな個体差があり、微細な差異に満ちた個別具体の言語状況だと言える。

2. ミシシッピ川、熊野川

「汽水」の舞台のニューオーリンズは、アメリカ南部、ミシシッピを描いたウィリアム・フォークナーの所縁の場所であり、また、1890年の来日前、アメリカ南部を拠点に文筆活動を行ったラフカディオ・ハーンが7年間過ごした場所だ。フォークナーもハーンも、それぞれ、その筆でニューオーリンズを描いている。そして、その場所はまた、中上健次に所縁の場所でもある。中上は、『アメリカ・アメリカ』の中で次のように記している。

私の感覚を使うなら、ここは匂うのだ。音楽が匂うのだ。ミシシッピの大きなどぶ川のような灰色の水の流れが、音となって固まってあのどうしようもない烙印、聖痕をおされたジャズやフラメンコ、ファド、タンゴ、さらにレゲエやサルサ、さらに、資本主義の生み出す奇形児としてのロックやパンクの放つ甘い腐臭や、今発見されたパンソリと同じ匂いが、マスカティーンにおの町にただよってる。

中上は、1982年、アメリカ、アイオワ大学の International Writing Program に招へいされ、同地に三ヶ月間滞在した。その後、レンタカーでニューオーリンズからフロリダを回り、さらにロサンゼルスまで旅している。その旅の途上で遭遇したミシシッピを、中上は、上のように記した。グレゴリー・ケズナジャットの「汽水」の主人公は、小説の最後、ミシシッピの河口にでる。「大陸をまっ二つに分けてメキシコ湾岸へ流れていく大河がここで海と合わさっていく」。中上のミシシッピとともに、「汽水」の大河は、中上の「一番はじめの出来事」が描く熊野川の流れをも合流させる。「でも僕はもうすぐ子供ではなくなる。僕は川と海のさかい目をみていた。この川の水は流れていって、塩からい濃い青色をしたわけのわからない海にはいりこみ、のみこまれてたちまち同化されてしまう」。その時、小説の言葉は、飲み込まれるのではなく、接触交流し葛藤を抱えながらも混じり合うことへの希求を携えるだろう。

芥川賞候補になった「開墾地」の主人公は、日本で大学院に通うラッセルだ。作中、彼

の、故郷アメリカ南部のノースカロライナへの帰郷が、過去のカットバックを挿入しつつ描かれる。著者であるケズナジャットが生まれ育ったノースカロライナを舞台とするこの小説は、自伝的な作品だ。同時に、アメリカ南部の葛に覆われた家の物語であるこの小説

は、フォークナーの世界の「末裔」であり、アメリカの^{ディープ・サウス}深南部で、すいかずらの絡まる家を描いたフォークナーの世界を引用する作品である。その翻案は優れた批評を伴う。そのひとつは、フォークナーのすいかずらが、日本産の葛であることを示した点に顕れる。この点で、「開墾地」は、中上健次の差別／物語論への応答ともなるだろう。中上は、ルポルタージュ『紀州——木の国・根の国物語』で、奈良県の吉野の土地に生い茂るセイタカアワダチソウを見て、差別の毒を持つ物語論を語っている。外からの異質な力が内部と出会い、両者の戦争によって勝者と敗者が生まれ、差別が産まれる。その現実の差別は文化においても起こり、物語が、そのような意味の差別を産出する言説装置であるとも中上は考えた。「開墾地」の日本の葛は日立の工場など、バブル期における日本企業のアメリカ進出とも重ねられるのだが、もはや葛が外来種であることは忘れられつつある。なにしろ、その地で家を守り生い茂る葛を刈りながらその土地を維持するのは、イラン出身のラッセルの父なのだから。かくして小説は、進出や侵略を可視化しつつ、それとは異なる移動を浮き彫りとする。小説は、旅する生と旅する言葉を燦めかせる。

「開墾地」のノースカロライナの姿は、フォークナーが描いた、北部の先進工業地帯に敗れたアメリカの^{ディープ・サウス}深南部の現在形だと言えるだろう。グローバル化は、より多くの人をより多く移動させる。芥川賞候補になったケズナジャットの「トラジェクトリー」は、「ルート」(根)ではなく「ルート」(経路)の、すなわち移動途上という生の可能性をひらく秀作だ。大切なのは、どこから来たでもどこへ行くでもない。いま、どこにいるのかだ。本作は、そのテーゼが真なることを小説ならではの方法で読み手に確信させる。「開墾地」もまた、そんな小説だ。葛とはまた、接触交流が伴う葛藤に由来する言葉なのかもしれない。その葛藤にこそ、きっと愉悦がある。もし、中上健次が生き返るなら、「開墾地」や「汽水」をどう読むのか、聴いてみたいと思った。